

目次

- P.1 空は心の原風景
P.2-3 児童文学講演会
雑誌『赤い鳥』に寄せて
P.4-5 「いずみ」のあゆみ
P.6 新館長あいさつ
親子で楽しむ製本
講習会

復刊 いずみ



空は心の原風景

永窪綾子

新しい元号「令和」を迎えた今年、昭和56年創刊の所沢図書館だより「いずみ」が復刊してちょうど100号を迎えるのも、新時代の幕開けを感じる。

図書館本館のある所沢航空記念公園には大空が広がっている。

山々に囲まれた田舎町に生まれ育った私は、幼いころ、どこまでも続く大空を飛ぶ飛行機を見上げながら「あの飛行機はどこへ行くのだろう、あの空の向こうには何があるのだろう」と空想にひたつたものだ。でも、大人になってそんな事はすっかり忘れていた。

所沢に引越してきたばかりのある日、都内に出かけ、地下鉄から上がって、陽光のまぶしさに一瞬目がくらみそうになりながら見上げた空に、高層ビルの狭い間に空が広がっているのに心が動いた。その時、忘れていた幼いころに抱いていた空への想いが蘇ってきた。そして色々の悩みを抱えた現代の子どもたちに、自分がそのころ野山や川で時間を忘れ自由に過ごした体験や想った事を何かの形で伝えたいという思いにかられた。

そんな小さな想いから児童文学の世界に足を踏み入れたのだが、創作しながら、また日々の生活の中で行き詰まったり思い悩む時、知らず知らず、私は自問自答しながら空を見上げている。

想い

悲しいとき 見上げる空に

ふうわり 浮かんでいる

自分の悲しさのような 想いが

寂しいとき 見上げる空に

ぽっかり 浮かんでいる

自分の寂しさのような 想いが

嬉しいとき 見上げる空に

ほっこり 浮かんでいる

自分の嬉しさのような 想いが

国境を越え どこまでも続く空

だれでも いつでも

見上げる 大空に

たくさんの想いが かけていく

ふうわり

ぽっかり

ほっこりと……



切り紙紙：永窪綾子氏

所沢市民になって40年になる。考えてみると、人生の半分以上をこの所沢に住み、子どもたちも所沢をふるさとして成長し、巣立っていった。教育的、文化的で環境に恵まれたこの所沢が、私は大好きだ。

近年、私はモンゴル、スリランカ、ネパールの人たちと交流を深め、親しくしている。誰もの上上に、国境を越えて広がる、心の原風景とも言えるあの大空が、いつまでも美しいものであってほしいと願いながら、果てしなく続く所沢の大空を、今日も見上げて深呼吸している。



ながくほ あやこ
永窪 綾子 氏

一九四三年、兵庫県養父市生まれ。少年詩、童話、絵本を執筆。日本児童文学者協会会員、東北アジアの会会員。

詩集『せりふのない木』(らくだ出版)『はるかな大空のむこうから―モンゴルの旅―』(ユーフォーブックス) 他多数出版。

児童文学講演会

雑誌『赤い鳥』に寄せて〜鈴木三重吉と北原白秋〜

講師 宮澤賢治氏 平成三十一年三月十日(日) 会場 所沢図書館本館

【はじめに】

今日は、『赤い鳥』を出した鈴木三重吉という人、そしてその後ろ盾で一生懸命盛り上げていた北原白秋という人、その他の人脈について触れた後、『赤い鳥』が文学史的にどういう流れで生まれたかということをお話ししたいと思います。

【三重吉と白秋】

三重吉は明治十五年生まれの五人兄弟。白秋は明治十八年生まれ、六人兄弟。似たようなときに生まれ、兄弟関係も同じような感じです。三重吉は帝国大学(現・東京大学)英文科に入学し、小説家。白秋は早稲田大学英文予科へ入学し、詩人・歌人・童謡作家になりました。

【三重吉と白秋の出会い】

三木露風が三重吉に白秋を紹介し、渡辺兼次郎(随筆家・邦楽研究家、鰻屋「宮川」の店主)の仲介により鰻屋「宮川」で会ったことから、二人は意気投合して一緒に活動しよう

ということになりました。



【絶縁の真相】

ところが、その後、二人は絶縁することになります。その理由を白秋が『白秋年纂一号』(昭和八年六月)に書いています。昭和七年頃、三重吉が白秋の両親の前で酒を飲んで暴れたり、小野浩、与田準一らの編集助手を勝手にやめさせたりしました。特に昭和八年四月、白秋が三重吉から童謡・童謡の選だけを頼まれて、自由詩は三重吉が自分でやると言われ、これを白秋が断ったため、暴言の応酬となり絶縁となったといえます。

三重吉の方は、「童謡・童謡だけ

やってよと言ったのがもとで、白秋が全部やめると言うから、やめてもらった」とさっぱりしています。

しかし、白秋は「三重吉追悼号」(『赤い鳥』第十二巻第三号)で「尊敬すべくして尊敬しあい、争うべくもなく争った」と書いています。

【夏目漱石と三重吉】

漱石は、明治三十八年一月に「吾輩は猫である」を『ホトトギス』に発表しました。また、三十九年九月に「草枕」を発表しました。その前年、学生だった三重吉はノイローゼになり、広島の能美島というところに戻っていた時に書いた「千鳥」を漱石に送りました。花魁(お魁)愛い式(内面に憂いを持った女性が母や男性を思慕する)の小説です。それを漱石が気に入って、『ホトトギス』に発表しましたことで、三重吉は一躍有名になりました。

【文学史的な流れ】

明治維新の頃は、日本に色々な外国の文明が入ってきました。思想として文明開化したのは明治十八年、坪内逍遙が書いた「小説神髓」というのがあります。ここで主張されたのは、世の中の状態をありのままに書くという、いわゆる自然主義です。

別名を写真主義とも言います。ありのままといっても、心の内を出す場合と見えたものをありのままに書く場合があります。

明治二十年代が外面的な自然主義、明治三十年代になると内面的な自然主義、いわゆる浪漫主義になります。十年単位で変わっていきませんが、明治四十年代になるとまた外面の自然主義になります。

まず、明治二十年代に正岡子規などが短歌や俳句の革新運動をしています。また、心象主義の内面的な動きが一つあり、これが漱石の方につながります。それからこの時代のものである雑誌もたくさん出てきますが、ここでは生まれてくるのが『ホトトギス』という俳句雑誌、こういうところで漱石は写生文の実践を行っているわけです。

明治二十年代の真ん中あたりに日清戦争があり、外面のありのままを書く、醜さや成金をテーマにした小説がたくさん出てきます。それではいかんということで、浪漫主義が出てきます。代表として『明星』などの雑誌が出てきました。

その後、内面の自然主義のものがだんだん売れなくなってきて出てきたのが、再び外面の自然主義です。

三重吉の仲間の森田草平が、心中事件をドキュメントにして小説『煤煙』を発表しました。醜いもの、エロいものをさらしていくのが、外面の自然主義だということになりました。

大正時代になり、これは子どもの教育によくはないということで、この辺から文学の質も変わってきました。そこで立ち上がったのが、童謡運動でした。

話は前後しますが、明治四十二年、この辺で初めて子どもに目が向くようになりました。小川未明という人が日本で初めての童話「赤い船」を書きました。これが非常に童心をくすぐるものでした。三重吉も「赤いそり」や「赤い女」といった赤いものを使った作品を書いています。

大正に入ってから状況が大きく変わってきます。大正はインテリの時代と言われています。明治はお伽噺の時代ですね。日本で初めてのお伽噺「こがね丸」が書かれています。時代の流れとして、お伽噺から童話に変えていかなければということ、その時期に中心となったのが漱石山脈、漱石の門下生がこの文化を興していきます。その中の一人、三重吉が白秋と手を組んで『赤い鳥』を興していくという流れになります。

【『赤い鳥』の創刊】

『赤い鳥』は大正七年七月に、童心・童謡に帰ろうという動きの中、生まれました。

概況は童詩、創作童謡、児童自由詩です。児童自由詩とは、素朴にありのままの子どもの気持ちをうたった詩のことです。白秋が作り、これが『赤い鳥』の売りになっています。創刊号には三重吉の唯一の創作童話「ぼっぼのお手帳」が掲載されています。鳩と赤ちゃんとの関係を描いた作品です。

表紙は清水良雄が描きました。三重吉が馬好きだったので馬の絵がよく使われ、昭和十一年の最終号にも馬が入っています。

【『赤い鳥』と童心主義】

『赤い鳥』は童話と童謡を創作する最初の文学運動でした。そこで言われているのが童心主義です。児童中心主義、児童心理主義ともいわれています。内容的にいうと①子どもは天使だ。②子どもに階級はない。③作文教育、いわゆるつづり方教育。これに非常に熱心だったのが三重吉です。作文教育は実生活を書かなくてはいけません。冷たい水でひび割れた手がきれいだなというのが一番

良いという考えが出てきました。その後、昭和の『赤い鳥』が廃れていく原因になったのが、この教育が全国に広まっていったことです。

【なぜ三重吉は『赤い鳥』に走ったか】

①小説行き詰まり説②長女すず説（大正五年生まれ・河北薬子の子）③ラング説（伝承童話、フェアリーテールにひかれた）があります。①の説が強いのが僕の印象です。三重吉の花魁憂い式の小説に対して、当時流行した自然主義、森田草平の「煤煙」、三田文学の谷崎潤一郎や永井荷風の刹那の美や官能の美小説に、三重吉が臆したのかもしれないですね。

【『赤い鳥』の成果】

童謡・自由詩の面では野村七蔵、多胡羊歯、佐藤義美、有賀連、与田準一、藤井樹郎、岡田泰三、松本篤造、福井研介、寺田栄一など。童話では坪田譲治、新美南吉などの多くの新人の発掘ができました。今もその影響がたくさん出ていて良かったと思います。

【何が新しくなったのか】

明治の「お伽噺」が「童話」とな

りました。わらべ歌や小学唱歌がなくなり、童謡にかわりました。白秋から言わせると、わらべ歌は卑俗なものが多いらしいです。江戸文学から来た古い教訓からの脱却、そして子どもの純正の保全です。

しかし真の意味で、子どもに無邪気で純朴な文章を書かせるための、文学運動という意味では、『赤い鳥』の存在は非常に意味があったと思います。



みやざわ けんじ
宮澤 賢治 氏

山梨県生まれ。東京大学国文学科卒。同大学院博士課程を単位取得満期退学。現在は白百合女子大学名誉教授を勤める。専門は近代日本児童文学、近代日本文学など。著作に『白秋研究資料集成全十巻』（宮澤健太郎名義・クレス出版）などがある。

所沢図書館だより

「いずみ」のあゆみ

所沢図書館だより「いずみ」が本号をもって通巻100号を迎えました。

それを記念し、これまでの「いずみ」の道のりを振り返ってみました。

○通巻第1号(昭和56・4)～

第1号は、昭和55年、航空公園内に新しい図書館(本館)が完成した、翌年の昭和56年4月に発行されました。表紙は「開館1年を迎えて」という見出しで始まっています。イラストも手書きで、なんとも懐かしい紙面となっています。



第2号には「視察者は全国的」という見出しの記事がありました。

当時は、全国的に図書館建設(新築・改築)の動きが活発になっていました。昭和55年に新しくなった所沢図書館にも、全国各地から毎月視察がありました。

視察では、建設や運営のほかに、当時最先端であった、図書館におけるコンピュータ・システムの導入に注目が集まったようです。

○通巻第8号(昭和57・6)～

第8号から、文章は手書きから活字となりました。

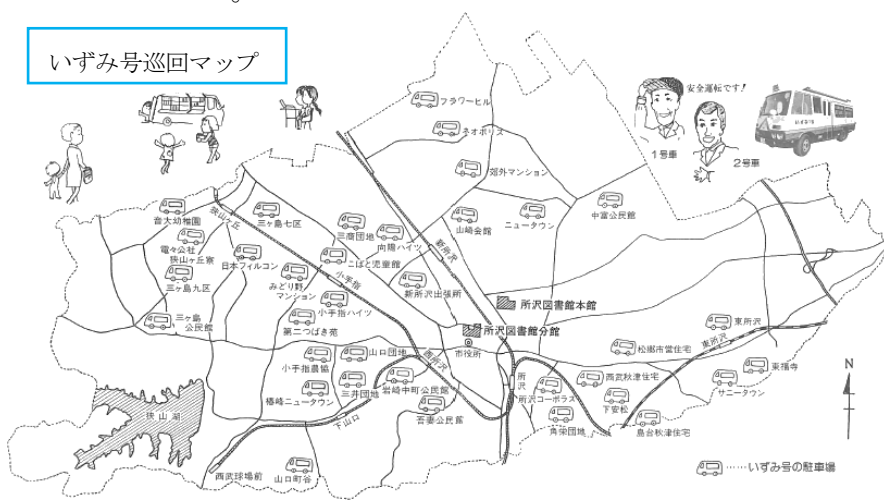
第11号の表紙に「図書館のコンピュータ」という記事があります。記事の中に「貸出や返却のときは、数字の上に印刷された縮模様のライトペンでなぞります。この模様のことを『バーコード』といいます。」という文章があります。今ではおなじみの「バーコード」ですが、当時は、耳慣れない言葉だったのです。

第12号からは、表紙に写真が使

われるようになりました。この頃から、手書きのイラストと共に写真も多く使われるようになりました。

第15号の特集は、「くらしに役立つてますか 移動図書館」でした。「くらしのなかに図書館を」を合言葉に、移動図書館・いずみ号は当時、市内35ヶ所の駐車場を巡回していました。

いずみ号巡回マップ



家の近くまで、「子鹿のバンビ」の曲とともにやってきたいずみ号を、心待ちにしていた方も多かったと思います。

○通巻第22号(昭和60年度)～

第22号から第25号まで、所沢在住の脚本家・作家である高橋玄洋氏による文章が、表紙に掲載されました。題字も高橋氏のもので、趣ある字とともに、素晴らしい文章に、高い関心をもって読みいただいた方も多いと思います。



続いて第26号から第29号の表紙では、児童文学作家、「はだかっ子」の作者でもある近藤健氏が、所沢の名所を紹介しています。第30号からは、内野富男氏、桜井幸男氏、荒川洋治氏、長谷川摂子氏、菅原峻氏と、所沢にゆかりのある著名な方々の文章が、綴られています。

○通巻第49号(平成5・3)〜

第49号から、図書館をもっと親しむもってご利用いただきたいという思いから、図書館の事業についてのご案内に力を入れていきます。49号の表紙では「司書の学級訪問始まる！」という見出しで、市内の小学校3年生に行う「ブックトーク」を紹介しています。

節目の第50号からは、「作家からの message(メッセージ)」というコーナーが始まります。



初回は、吉目木晴彦氏に、芥川賞受賞作『寂寥郊野』について書いていただきました。

その後も大館欣一氏に『御犬養育村始末』、大山真人氏に『老いてこそ二人で生きたい』、山本萌氏に『墨の伝言「萌庵日記」』、青木雅子氏に『みどりのしづくを求めて』、製茶機械の父、高林謙三伝、永窪綾子氏に詩集『もういいかいの空』

と、5人の方々に作品にかける思いを綴ってもらいました。

○通巻第56号(平成7・7)〜

第56号からは、斎藤修治氏による「斎藤修治の万葉歌碑めぐり」が第61号まで掲載されます。

第62号からは、長谷川摂子氏による「長谷川摂子の子どもの本」をはじめ、後藤暢氏の「図書館のおはなし―現状と目指すもの―」、片岡直子氏の「回想本箱」、片桐園氏の「中国へ、子どもの本の旅」、青木雅子氏の「占領下時代の子ども本の展示をみて」、宮本八恵子氏の「民具から学ぶ所沢の暮らしぶり」、大久保寛氏の「なんの因果か、翻訳家業」などのエッセイが掲載され、紙面を奥深いものにしていただきました。

○通巻第79号(復刊第1号/平成24・7)〜第100号

その後、しばらく休刊の期間を経て、平成24年に復刊第1号となる、通巻第79号を発行しました。高橋玄洋氏に再び表紙を飾っていただき、この号以降、題字「いずみ」も高橋氏によるものとなりました。



この第79号の特集記事は、「所沢図書館のあゆみ」でした。所沢図書館の歴史は、明治までさかのぼります。明治43年8月4日、所沢町立図書館が所沢尋常高等小学校(現・所沢小学校)に仮設され、初代館長は校長(兼務)でした。「図書館のあゆみ」は、「復刊いずみ」第2号と第8号にも掲載され、平成26年までの歴史を綴っています。



昭和45年(撮影)当時の市立図書館
写真提供: 所沢市生涯学習推進センター

第86号では、「所沢市立図書館は、開館50周年を迎えました!」という見出しが表紙を飾っています。

す。6頁には、「未来の所沢図書館は？」という記事があります。来館した小中学生に、未来の所沢図書館がどうなっているか、アンケートを取ったものです。記事では、その中から10枚紹介しています。その一つに「1枚の利用券で日本全国の本を借りることができ」というのがあります。そんな未来が早く来るといいですね。

その後も図書館に親しむもっていただけるよう、図書館行事やレファレンスサービスの紹介など、さまざまな記事を載せて、現在に至っています。

また、紙面の都合で、今回はご紹介できませんでしたが、作家や文筆家の方々だけではなく、「利用者登場」というコーナーなどで、多くの利用者の皆様にも図書館への思いを語っていただきました。

そのほかにも、多くの皆様のお力添えをいただき、ようやく第100号を発行することができました。

今後も、市民の皆様にあされる所沢図書館となるよう、図書館だより「いずみ」は、皆様への情報発信紙として、掲載内容の充実に努めてまいります。



新館長あいさつ



所沢図書館長

古田晃一

今年の4月より新しく所沢図書館長に就任いたしました古田と申します。

子どもの頃は、推理小説が好きでアガサ・クリステイの作品をよく読んでいました。作品に登場する名探偵ポワロが灰色の脳細胞を使って難事件を解決していく様は痛快でした。現在は本を読む機会は減りましたが、これからは自分の人生をより豊かにしていくためにも、本を読む機会を増やしていきたいと思っています。

皆様にとりましても、図書館は本と出会い、読書に親しみながら自己の能力を磨き、人生に必要な知識・技術を生涯にわたって学ぶことのできる場所です。どうか図書館を積極的にご利用いただきますようお願い申し上げます。

所沢図書館は、市民の皆様の暮らしに根ざし、多くの人に親しまれる図書館づくりを進めてまいりますので、これからもどうかよろしくお願いたします。

「行事報告」

親子で楽しむ製本講習会

所沢図書館本館では、7月20日(土)・21日(日)の2日間にわたり、「親子で楽しむ製本講習会」を開催しました。「東村山製本研究会」の鎌田敏雄氏を講師にお迎えし、小学生から大人まで、和とじ本の製本にチャレンジしました。

講習会では、まず参加者の皆さんが、それぞれ自分の好きな色の表紙を選びました。

その後、製本に関する歴史や基礎知識を学びながら、講師のお手本を参考に、作業を始めました。



本を綴じるための穴を開ける際には、目打ち(穴を開ける道具)を使用しました。初めて目打ちを手にした子どもたちも、一生懸命

作業する姿が印象的でした。

目打ちで開けた穴に糸を通す際には、決められた順番にたるみなく通さなければならず、子どもたちだけでなく、大人の方も苦労していました。

完成した和とじ本は、どれもみんな素敵でした。自分だけの、世界に一つだけの和とじ本を手にし、皆さんとても嬉しそうでした。

子どもたちにとっては、夏休みの良い思い出となったのではないのでしょうか。



編集後記

今回は、記念号なので、特集記事の一つを『「いずみ」のあゆみ』にしようということになった。1号から99号まで目を通すと、所沢図書館の歴史を垣間見ただけでなく、「いずみ」が時代の流れの記録でもあることに気がついた。次回号も心して、頑張ります!(T)

編集発行：所沢市立所沢図書館 〒359-0042 所沢市並木1-13

ホームページアドレス パソコン <https://www.tokorozawa-library.jp>

スマートフォン <https://www.tokorozawa-library.jp/opw/OPS/OPSINDEX.CSP>

電話 / FAX

本館 04-2995-6311 / 04-2992-1421
所沢分館 04-2923-1243 / 04-2928-8195
椿峰分館 04-2924-8041 / 04-2928-8148
狭山ヶ丘分館 04-2949-1193 / 04-2949-8577
松井小学校図書館 04-2992-2796 / 04-2992-2797

富岡分館 04-2943-3636 / 04-2943-6680
吾妻分館 04-2924-0249 / 04-2928-8250
柳瀬分館 04-2944-4023 / 04-2945-7236
新所沢分館 04-2929-1905 / 04-2929-1906

2019年 8月29日発行 復刊いずみ22号 (通巻100号)